

群衆へのパウロの弁明

異邦人トロフィモを神殿の神聖な内庭に連れ込んだとの嫌疑を受けて、使徒パウロはユダヤ教過激派の煽動する群衆によって捕らえられ、集団的リンチによってまさに殺されようとするところを、騒ぎを聞いて駆けつけたローマ駐留軍の手によって救出された。ローマ軍の守備隊長の名はクラウディウス・リシア（23：26）。「その男を殺してしまえ」と叫び続ける群衆の怒りの対象とされているパウロを危険な人物と見たリシアは、彼を二本の鎖で縛り、兵營に連れて行って厳しく取り調べるように命じた。

アントニオ塔の階段にさしかかった時、パウロは丁寧なギリシャ語で、自分はタルソス生まれのユダヤ人で、キリキヤ州のれっきとした都市の市民であることを明らかにした後、民衆に話をさせてくれるようにと千人隊長リシアにお願いした。彼がそれを許したので、パウロは階段の上から群衆に向かってヘブライ語で話し出した。

彼はここで、自分は今、民族の伝統とモーセの律法とを軽んじ、またこの神聖な神殿を汚す者として非難され、糾弾されているが、自分はそのような者ではない、と語り、自分のファリサイ人としての生き直し、教会の迫害者としての過去、ダマスコ途上における復活の主との出会いと劇的回心、そして異邦人伝道への神の召命について、静かに、しかも情熱を込めて語る。

しかし、パウロが、神が彼を異邦人伝道に召されたのは、罪を認めず、福音を受け入れようとならない彼らの不信仰の故であると語ったとき、群衆は怒り狂い、「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしておけない」と叫び続け、空中に上着を投げつけ、ちりをまき散らす始末であった。

千人隊長はヘブライ語が全く解せなかったので、パウロが何を群衆に話しているのか、なぜ群衆が怒り狂って騒ぐのか分からなかった。そこで彼は、パウロを兵營に引き入れるように命じ、どういう訳で彼に対してこんなわめきたてるのかを確かめるために、彼を鞭打ちの拷問にかけて取り調べるよう言い渡した。

拷問用の鞭は皮で作られ、先の尖った骨や鉛が間隔をおいてはめ込まれていた。それで打たれると、ほとんどの人が、激痛のために気絶したり、時には死んだという。あまりにも残酷な刑であったので、主として奴隷や非ローマ人に対して行なわれ、ローマ市民には行なわれてはならないという法律があった。そこでパウロは、そのような不当な仕打ちに毅然として抗議した。パウロがローマ市民であるということは、現場を指揮していた百人隊長を驚かせた。彼はただちにそのことを千人隊長に報告した。

恐らく、その時のパウロは、群衆に襲われ、宮の外庭に引きずり出され、人々によって打たれて、ひどい仕打ちを受けていたので、痛々しい姿をしていたのであろう。「わたしはこの市民権を多額の金で買い取ったのだ」というリシアの言葉の背後には、こんな貧相な男が！という思いがあったと思われる。

それゆえ、パウロが生まれながらのローマの市民権を持った人であることが知った時の彼らの驚きは大きかった。パウロを取り調べていた人たちは、ただちに彼から身を引いた。千人隊長リシアも、パウロを不当に扱ってきたことを知って恐れた。それ以来パウロに対する彼らの取り扱いが一変した。使徒パウロは、彼に対するユダヤ過激派による暗殺の危険から、このリシアによって守られて、総督府のあるカイサリアに送られて行くことになる。